

# 早稲田大学日本語教育学会 2007年 秋季大会 発表要旨

## 【口頭発表】

### 第1会議室(14:00-17:15)

14:00-14:30

遠隔の日本語チュートリアルにおける社会言語的調整：遠隔接触場面の turn-taking と話題の概念を中心に

尹智鉉

本稿では、遠隔チュートリアルの接触場面をネウストブニー(1982、1995b)の社会言語能力のモデルを援用して、turn-taking と話題の概念を中心に検証した。また、尹(2003、2004)では行わなかった、同じ参加者による複数回のセッション結果をデータに、参加者間のインターアクションの変容も明らかにした。最後に、分析した結果を総括し、接触場面における調整の質と量の問題やチュートリアルを考えるパラダイム、第二言語習得における遠隔チュートリアルの持ち場に関する考察を行った。

14:35-15:05

ボランティアによる地域日本語活動への一提案 - 生活行動支援を取り入れた素材集の活用 -

遠藤知佐

非母語話者の生活上の行動支援と参加者間の交流促進、および、認知的な言語学習の要素を取り入れた素材集を用いて行われた地域日本語活動を、縦断的な参与観察を含めたフィールドワークとインタビューにより調査した。その結果、活動ではボランティアが緩やかに場を管理し、実生活に生きる行動支援と自己開示を含めた交流の双方が実現されていた。また、素材集は参加者間の話題の維持と、外国人参加者による自発的な話題の展開のうえで有効な役割を果たしていた。言語習得の観点からは、外国人参加者の活動の場における参加形態に変化が見られたり、語彙だけでなく、社会言語や社会文化の習得が行われた可能性が示唆された。

15:10-15:40

日本語・日本事情教育における文化の位置づけの現在とその課題 90年代以降の日本事情教育実践研究を中心に

三代純平

2000年以降、多文化共生が社会的問題となり、日本語教育もその文脈で語られることが多くなった。しかし「文化」の内実はどのようにとらえられているのだろうか。90年代以降の「文化」を扱った日本語・日本語教育の論考123本を分析することで、日本語教育の中で「文化」を取り上げる際の「文化観」「教育目的」「実践形態」を分類した。

その結果、以下の3点が明らかになった。

- ・理論は文化非本質の立場に立つものが増えた一方で、実践は文化本質型が主流となっている。
- ・文化観と能力と実践形態が必ずしも対応していない。
- ・文化が前提として扱われることでその内実を問わない実践がある。

16:10-16:40

オーストラリア日本語教師の言語教育観の形成と変容

太田裕子

本研究はオーストラリアの初等中等教育機関で教える日本語教師が、どのように言語教育観を形成し、変容させてきたかを明らかにすることを目的とする。特に、日本語教育実践、私生活における要因が、言語教育観の形成と変容にどのような影響を与えているのか、変化する状況の中で一人一人の教師はどのように主体的に考え、実践を行ってきたのかを、ライフヒストリー・インタビューの手法を用い考察する。本発表では、生徒一人一人の声や文化を尊重し、自尊感情や達成感に配慮する小学校の日本語教師S教諭の事例に焦点を当て、そのような言語教育観がどのように形成され変容してきたかを検討する。最後にオーストラリアの言語教育政策に採用された異文化間言語学習への示唆を述べる。

16:45-17:15

コミュニケーション活動型クラスにおける教師の役割

高木美嘉・金東奎・須賀和香子・田中美樹・津村奈央・蒲谷宏

授業において、教師はどのように学習者の主体的なコミュニケーション活動を支援していけばよいのか、その具体的な様相は必ずしも明確になっているとは言えない。本発表は、「コミュニケーション活動型クラス(学習者の「表現行為」「理解行為」の「やりとり」を重視した授業を行う教室)」において、「教師」がどのような役割を果たしているのかについて、考察を試みるものである。分析資料として、早稲田大学日本語教育研究センター設置科目である日本語5・6クラス(中・上級)の「授業記録」という、教師側の視点・教師の実感による質的データを取り上げ、「KJ法」の手法を使って「教師の役割とは何か」を明らかにしていく。

第3会議室(14:00-16:40)

14:00-14:30

開化期の日本語学習書に関する考察 - 日本語教育の受け手側の視点から制作された学習書を中心に -

金義泳

日本語教育の受け手側の視点から制作された開化期の日本語学習書を二つの観点から分析した結果、1890年代に入ってから韓国支配を目指す「同化」のための日本語教育が強化する中、自文化を保護・育成するための内容と自主独立と民族意識を高めるための内容を多く取り入れたということが分かった。そして、当時の日本語学習書は日本語を学習する目的だけでなく、一般教養書としての役割も果たしていたと考えられる。それは、日本語を通して先進文物を学び、社会・経済的な国の発展を図ろうとしていたからであろう。そこから、当時の日本語教育の受け手側の韓国にとって必要な日本語教育というのは、国の近代化や発展のためのものであり、自主独立と民族意識を高めるためのものであったのが本稿の学習書の内容分析を通して分かった。

14:35-15:05

松本亀次郎の日本語教材に関する研究 「国語教育」から「日本語教育」への転身と変容

田中祐輔

本研究は、近代日本語教育黎明期に活躍した松本亀次郎という日本語教師が「国語教育」から「日本語教育」へと転身した際に直面した問題と対応について明らかにし、考察するものである。これまで、戦前の日本語教育に関する議論は「国語教育の延長でしかなかった」あるいは「戦前は侵略で、戦後は国際交流」といった単純な議論に終始しがちであった。しかし、本研究では、教材分析を通じて教授観や教授法を科学的に検証することで、先行研究では指摘されてこなかった「国語」と「日本語」との狭間で生じた日本語教師の葛藤と変容を明らかにする。

15:10-15:40

教科書にみる 1970 年代の中国の日本語教育

本田弘之

中国において日本語教育が本格的におこなわれるようになったのは 1970 年代である。ところで、この時期に出版された教科書を比較すると、かなり短いスパンで日本語教育の目的が変化したことがうかがえる。

1970 年代最初期は、日本語教育が中国における社会主義の優位性を明らかにするプロパガンダの一環と考えられ、一方的に「自らについて語る」ための教科書が作成される。しかし、文革が終結すると、その内容は、日本人との交流を目的とするものに一新され、会話練習が中心となった。ところが、その後、ふたたび「知識」としての日本語の習得に重きをおいた「総合型テキスト」が作られるようになり、日本語を学ぶ目的が、内向していく動きがみられるようになった。本発表では、教科書にあらわれた学習目的の変化をたどり、中国の日本語教育において「教科書がもつ意味」を考えてみたい。

16:10-16:40

中国語母語話者の長音の発音における中間言語音声の特徴

児崎静佳

本稿では中国語母語話者の長音の発音に現れた中間言語音声の具体例を示し、その特徴の分析を行う。従来、中国語母語話者の長音の生成に関する先行研究では、長音の短音化を指摘し、それを母語干渉という点から論じたものがほとんどであった。しかしながら、学習者の長音の発音に現れる問題は短音化だけではなく、単に短音化だけを取り上げても長音の発音の全体像を把握することは難しい。そこで、本稿では中国語母語話者を対象に生成調査を行い、そこで観察された学習者特有の複数の音声特徴について述べる。

## 【ポスター発表】

3階ロビー（奇数番号 13:30-14:30 偶数番号 15:10-16:10）

13:30-14:30

教室活動における「コミュニケーション主体」とは何か 「考えるための日本語1」の参与観察を通して

五十嵐まゆ・井上春菜・河上加苗・小島佳子・古川奈美・松井孝浩

教室自体が社会であり、教室をコミュニケーションの場として捉えている「総合」の初級レベル「考えるための日本語1」（以下、「考える1」）において、筆者らの行った参与観察では、思考と表現の活性化に特化するあまりに、他者の存在に注目したコミュニケーションが十分に行われなかった実態が見られた。そこから、そもそも教室活動の目的そのものが共有されないのではないかという疑問、教室活動の中に参加する一人ひとりが自分自身をどのような存在であると捉えているのだろうかという疑問が浮かびあがってきた。よって筆者らは、これらの問題を「総合」の初級レベルにおける課題として取り上げ、コミュニケーションの場としての教室で、参加者一人ひとりがコミュニケーション主体として関わり、思考と表現の活性化を図るとはどういうことなのかを考える。

13:30-14:30

「ものだ」文の意味 形式名詞述語文再考の手がかりとして

金森廣子

「ものだ」文の実例から、教育の見直しと形式名詞述語文の再検討を提案する。

「ものだ」文とは、名詞「もの」にコピュラ「だ」の類の接続した文末形式を指す。名詞述語文と、機能語化した「ものだ」文に分けて論じられることが多く、日本語教育では、助動詞化した「ものだ」が表すと考えられてきた意味の典型例のみが提示される。しかし、名詞述語文としての「ものだ」文と機能語化した「ものだ」文は連続しており、いずれかに明確に区別できない「ものだ」文が多く存在する。また、「もの(だ)」の核となる意味によって貫かれている。「ものだ」文の意味は、語用論的な要因によって決定される。

実態に即した教育と、形式名詞述語文全体の見直しが必要である。

13:30-14:30

自己モニター力の向上を目指した活動型クラス「ディスカベーション」の試み

山内薫・青木優子・小林美希

本発表は、2007年度春学期の実践14-2の活動型授業において試みた、初・中級前半レベルを対象とした「ディスカベーション」という新しい枠組みによる実践を報告するとともに、その有効性を学習者のフォローアップインタビューの分析を通して検証するものである。授業をデザインしていくにあたり、実習生は学習者の日本語力の向上とともに、自己モニター力の向上を目標とし、各活動の「文脈化」、コミュニケーションの「実質化」およびスキャフォールディングについて工夫した。フォローアップインタビューの分析の結果、学習者は「自分にとってどのような効果をもたらすか」というマクロのメタ認知を働かせ、会話能力の向上という日本語学習としての課題そのものの向上のみならず、授業で扱ったテーマについての理解、関心、および他者との意見交換を通して自分自身の考えを深め、自己発見や自己表現を行っていくことに自分なりの意義を見出していることが分かった。上記

の結果から、「ディスカベーション」活動は、自己モニター力の向上を促す環境を有すものであり、初・中級前半レベルの日本語指導に取り入れうる活動であるといえるだろう。

13:30-14:30

アイカメラ（眼球運動測定装置）を使ったインターアクション行動の分析：その課題と応用性

宮崎里司

本セッションでは、従来の言語教育研究におけるデータ収集方法では、十分に精査できなかった、インターアクション問題の分析に関して、眼球運動測定装置であるアイカメラを応用するさまざまな研究課題を検証する意義を、具体的な事例を挙げながら説く。また、こうした先行研究を基に、日本語教育研究の分野で、どのような応用課題がデザインできるのかを、接触場面でのインターアクション行動の分析方法を発展させる可能性についても言及する。アイカメラの機器については、注視点記録装置 E M R - NL 8 B (ナック社) を使い、具体的なデータ収集方法をデモンストレーションしながら、よりわかりやすいセッションをデザインする。

13:30-14:30

主語につく助詞における日本人の使用現状

ベロニカ・ゲオルギエバ

本研究の目的は、主語に「は」と「が」がつくルールにおいて日本語母語話者の使用の現状を明らかにすることである。

次の通りに調査を行なった。調査は、2つの項目からなるもので、10人の日本語母語話者に実施した。まず、被験者は文字が入っていない”Frog, Where Are You?”という絵本を見ながら、自分の言葉で自由にストーリーを語った。その次、同じ絵本に文字が入ったものを用いて、穴埋め式で被験者に助詞のところを埋めさせた。同時に、Think-a-loudの方法で、「は」と「が」のいずれしか用いられないか、あるいは両方が用いられるかを語ってもらった。被験者が「は」と「が」両方が使われると答えた際に、どう違うかを求めた。

15:10-16:10

会話能力向上を目指した授業の設計と運営を振り返って

酒井清夏・田所希佳子

本発表では、『聞く・考える・話す 留学生のための初級にほんご会話』という教科書を使って実際に行った実践授業の具体例を交えながら、その概要・詳細を説明し、考察していく。

授業においては、学習者の会話能力向上を目指し、学習者に既習の文型・表現を場面と共に再認識させることや、表現のバリエーションを増やすことに焦点を当てた。そしてそのためのモニター能力を高めるために、自作の「考えてみよう・使ってみようプリント」を用いて、教室内と教室外のギャップを埋めようとした。さらに「にこちゃん・だめちゃんマーク」を作製し、授業の工夫を行った。それらの効果について述べていく。また、同時に実践していく過程で直面した問題や、反省を交えながら、一から授業を作り上げていくとはどういうことなのかを考えていくこととする。

15:10-16:10

参加型日本語教育の新たな試み 自分を表現するための演劇的コミュニケーション

鮮于媚・今野成子・佐藤正則

本稿は 2007 年度春学期の日本語教育実践研究(15)について報告するとともにそこで見えてきた新たな授業の可能性を提示する。本実践(15)では演劇の手法を用いた参加型授業を試みた。本実践(15)では演劇という手法を用いるが、学習者自身が持っている日本語の知識を最大限、引き出すためにあえて、シナリオを作成しない形態を取ることにした。したがって、自分が思いついたそのものをみんなと一緒に演じ、そこで生まれた「生のコミュニケーション」が重視し、授業を行った。その結果、学習者および実習生にも役割の壁を超え、「個人」と「個人」として「お互いを知る、他者のことを知る」という意識の変容が見られた。

15:10-16:10

行動展開しない/させないことを「意図」した「許可求め」「依頼」「指示・命令」「許可与え」に関する考察

伴野崇生

本研究では、「許可与え表現」「指示・命令表現」とその「あたかも表現」としての「許可求め表現」「依頼表現」について、日本語学習者が自分自身のコミュニケーションを振り返るための「手がかり」を得ることを目的とし考察を行った。その結果、行動展開しない/させないことを「意図」した「許可与え表現」および「指示・命令表現」では、「あたかも許可求め表現」「あたかも依頼表現」を用いると、「相手」の「行動」が「自分」の「不利益」であることを示すことになり、却って「敬語表現」的でなくなることが示された。なお、用語はすべて、蒲谷宏・川口義一・坂本恵(1998)および蒲谷宏(2006)によった。

[ 参考文献 ]

蒲谷宏・川口義一・坂本恵(1998)『敬語表現』大修館書店

蒲谷宏(2006)「敬語表現」と「敬語表現教育」『敬語表現教育の方法』大修館書店

15:10-16:10

チームティーチングにおけるピリーフスの共有 ノンネイティブ教師とネイティブ教師の話し合いを例として

佐藤雅子

海外ではノンネイティブ教師(NNT)とネイティブ教師(NT)のチームティーチング(TT)で日本語教育を行っている機関が多く存在し、効率・効果のため NNT は文法、NT は会話と役割分担が行われているケースが多い。しかし、このような TT は学校の方針や自分の役割に強く縛られるあまり自分のピリーフスを意識せずに教室活動を行いがちである。無意識のピリーフスが相手教師と異なった際は衝突が起きやすく、自分のピリーフスを意識化していると相手を受容しやすいことが調査で明らかになった。本発表は NNT と NT の TT でピリーフスの意識化、共有を行った教室活動の実践をとおして、技術的な効率・効果のための役割分担のための TT ではなく、教師同士が影響を与えあい成長する教師協働としての TT の意義について述べる。